
黒地蔵

秋月真氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒地蔵

【ZPDF】

N6702E

【作者名】

秋月真氷

【あらすじ】

「僕」の高校の近くに、黒いお地蔵様がいる。願いを聞き入れてくれるとか言い噂もあるけど…それは、どうだろ？

(前書き)

グロくは表現しておりませんが、人が死にます。
ご注意下さい。

僕の通う高校の近くに、お地蔵様がいる。

そんなに古いものじゃない。

2、3年前に死んだ子供のために建てられたお地蔵様。黒っぽいその色から、この辺では「黒地蔵」って呼ばれて、一柱だけぽつりと存在している。

仏に「柱」って言つ、神に対する数え方で合つてるかどうかは不明だけど、とにかく、いる。

何となく、「ある」っていう言い方は失礼な気がするから、「いる」とて言つとく。

僕は、信心深いんだ。

毎朝、供え物をするほどだ。

それはともかく。

その「黒地蔵」には、こんな言い伝えがある。

「強く願えば、その願いを叶えてくれる」

…よくある都市伝説だ。

何の代償も無しに、神や仏に縋るのはどうかと思つた。

信じていらない訳じゃないが、「苦しい時の神頼み」のよひで、僕はあまり言い伝えに対して好意的では無い。

…いや、お地蔵様には好意的だよ？
結構、愛らしい顔してると思うし。

まあ、僕の意見は横に置いて。

クラスメイトの1人が試すと言つて聞かないのか。
恋愛成就を祈りたいと。

それは祈る仏が違うだろ。

お地蔵様は万能じゃないんだぞ？

神様ですら八百万もいるって言うのに、一柱で何でも叶えることの出来る仏がいたら神々の立場無いぞ。

いやいや、僕のカミサマ論もどうでも良い。とにかく、そのクラスメイト…女子ね…が、試すから僕にも来いと言つのか。

僕が彼女の幼馴染だからなんだけど。何で僕まで行かなきゃならないのぞ。祈り事は独りでやるものだろ、普通。だけど彼女の言い分は、以下のよくなもの。

「独りじゃ怖いもの。」

「なんで？」

「あの辺って、ちょっと物騒じゃない。それに、いつも先客がいるし…」

「先客くらい別にいいだろう？」

「不気味なのよ。物凄く。」

「はいはい。わかりましたよ。

確かに、あの辺りは「通り魔による殺人」が多い。ここ数年で「通り魔」に殺された人間は軽く30人を超えている。しかも警察にはまだ捕まつていない。昨日も、あの辺で男の首が見つかったらしい。

…どうせ帰り道の途中だ。

今朝、お供え物を忘れていたこともあるし。

行けばいいんだろう、行けば。

だけど、というか案の定と言つか。
お地蔵様の前には先客がいたんだ。
派手な格好の女人の人。

爪も、口紅も、服装すらも真っ赤。

その人が、一心不乱に「黒地蔵」に祈つていた。
なるほど、不気味つて言つた気持ちがよくわかる。

彼女の言い分を納得してしまはばど、異様で異常な雰囲氣。

「どうして……の？」

風に乗つて聞こえてくる女人の声。
途切れ途切れだから、何を祈つてのかよくわからないけど、お地
蔵様に対する愚痴みたいに聞こえる。

「あの人気が先客？」

「そう。あの人、毎日ここにいて、祈つてゐるの。」

「あの格好で？」

「あの格好で。」

確かに、そりやあ怖いや。

あの様子は尋常じやない。

逃げた方がいい。

僕の脳内の警報が鳴りつけなしだよ。

「よつやくなの？」

女人の嬉しそうな呟きが、僕の耳にはつきりと届いた。
同時に全身が粟立つ。

二ヶ口

僕の第六感的な、何かがそう告げる。
言われなくてもわかってるよ。

逃げるとも、彼女と一緒に。

くるりと女がこちらを見た瞬間。

僕は脱兎の如く駆け出した。

無論、幼馴染の彼女と共に。

そりやあ逃げるでしょう。

完全に、正気を失っている日だつたんだから。

しかも、こっちを見てにやりと笑ったし。

「何? ねえ、なんなの! ?

わからない、と言わんばかりに彼女は不思議そうな声をあげる。

だけど、女人が尋常じゃないのはわかっているらしい。

その場に立ち止まるような愚は犯さない。

そもそもどうう。

後ろから追つて来てるんだよね、あの女人の人。

包丁持つて、物凄い形相で。

「まさか、あの人通り魔! ?

「さあね。」

包丁を持っていますだけで、あの人通り魔だと判断するのは愚かなことだ。

だけど、立ち止まつてはいけないのも確かだろうね。
こっちに向かつて包丁振り上げてるし。

「死ね…死ね、死ね、死ね死ねええつ…！」

後ろから追つてくる女の人の声が、やけに大きく響く。正直に言おう、かなり怖い。

一緒にいる彼女にいたつては、悲鳴を上げるほどに。想像してみてくれるかい？

真っ赤な服を着た女の人が。

黄昏時に。

人気の無い道で。

黒い髪を振り乱しながら。

狂気に満ちた笑みを浮かべて。追いかけてきている。

この僕が、思わずＷＩＨ調に語りてしまつほど、異様なんだから。…そりやあ、悲鳴の一つもあげたくなると思うよ。だけど、一緒にいる彼女が取り乱してくれていてるお陰で、僕は随分冷静でいられる。

あの女人より、僕達の方が、数段足が速いこと。あの包丁では、せいぜい殺せても一人である事。

「待ちなさあいつ！」

「いやあ…待てませんね。」

「私の子供のために、死んでええつ！」

「だから、お断りします。」

僕の答えが不服らしい。

女人人は、僕達を…いや、僕を追いかけてきている。

「あなたが死ねば！あなたが死ねば！あの子はきっと浮かばれる…」

「本当に何を言つてゐるの！？」

「殺されたあの子のために、死んでよおおおつ」

ああ、なるほど。

子供と死に別れたのか。

殺されたって言つてたから、殺した犯人にその想いをぶつければ良いのにね。

お地蔵様もいい迷惑だろうよ。

「3年待つたわ！待つて、待つて…待ち焦がれたわ！」

「はあ！？」

「あの子が死んで、代わりにお地蔵様ができたけど…でも、違うのよおー！」

「な…何を…」

「お地蔵様は願いを叶えてくれるのぉ…私の祈りに答えてくださるのよおおおー！」

恍惚の表情で、女人人が言つ。

包丁を僕達に向かつて掲げたまま。

どうやら、あの女人の人の子供つて言つのは、「黒地蔵」が建立される理由になつた子供らしいね。

多分、毎日のように地蔵に祈つていたんだろう。
何を祈つていたのかなんて、僕にはわからないけれど。
見当をつけるなら、子供を生き返らせて欲しい、とか。
あるいは犯人を見つけて殺したい、とか。
包丁を持つてるから、後者かな。

「警察に行かなくて良いの！？」

「警察は面倒なことになりそだだから却下。」

「面倒つて…そんなこと言つてる場合！？」

「…………」

「ねえ、一体何を考へてるの?」

わて、トトロで問題です。

僕は今、何を考えているのでしょうか?

…正解は、「苦しい時の神頼み」。

この角を右に曲がれば、ぐるりと一周、「黒地蔵」のところに戻る。正直な話、どうにかなるとは思っていないんだけどね。でも、言い伝えなんだろう?

「強く願えば、その願いを叶えてくれる」

なら、願おうか。

助かるために。

お地蔵様、お地蔵様。

どうかお救い下さい。

毎日、あなたに供物を捧げているでしょう?

いつこうシチューションのためにやつてた訳じゃないけど。

オン カカカ ビサンマヒ ソワカ

地蔵菩薩への真言を心中で唱え、僕はもう一度後ろを振り向く。

…あ、何で真言なんか覚えているんだってツッ 「//せ無しの方向で」とにかく、そうしてみた。

すると…

驚いたよ。

「黒地蔵」の前で、女の方は忽然と姿を消したんだ。とても不思議そうな顔をして。

「何で…私が……？」

消える直前、そんな言葉が僕の耳に届いた。
消えなければならぬ理由に、心当たりなど無いかのよう。
でも…僕にはわかるような気がする。

あの人の本当の救いは、子供と同じ所へ向かうこと。
犯人への恨みを募らせながら生きるよりも。
帰つてこない子供を想つて、泣いて過ごすよりも。

あの人を子供のいる「あの世」へ送つた方が救われるってことか。

「助かつた…の？」
「多分ね。」

そう言つた僕に、彼女は安心したように抱きついて泣き出した。

「殺されるかと思った…」
「だろうね。正直、僕も怖かつた。」
「全然そんな風には見えなかつたけど。」
「いや、内心ヒヤヒヤしていたよ。」

言いながら、僕は鞄を開ける。

あの状況下で放り出さなかつたことを、諒めて欲しいね。

「何？」
「いや、お供え物をしようと思つても。多分、助けてもらつたんだ
し。」
「意外と信心深いんだ？」

れつきの涙はどこへ行つたのやら。

彼女がにっこり笑つて僕に言つ。

「女心と秋の空」って言つけど、女は心だけじゃなくて表情も変わりやすいんだね。

だけど、夕日を浴びて橙に染まつた彼女は、ゾクリとするほど美しいかった。

だからこそ、僕は、君を……

「うん、やっぱり綺麗だ。」「

「い……いきなり何……」

「ちょっと予定が狂つたけど、今まで待つた甲斐があつたかな。」「

「あの……その……ええっと……」

恥ずかしげに俯く彼女の肩を左手で掴み、僕は思い切りその体を引き寄せる。

彼女はあつと、ドラマのヒロインになつた気分だらつ。ほとんど抵抗も無く、僕の腕の中に引き寄せられていく。

「あ……。」

彼女が小さく声をあげたの。

どすり、といづ鈍い音がしたのはほぼ同時。

僕が右手に握っていたナイフが。

彼女の心臓を。

刺し、貫く。

不思議そつな表情と共に、彼女はゆっくり僕を見上げる。

「なん……で……？」

「お供え。」

「……え？」

「だから、君は供物なんだよ。黒地蔵への。」

「わた…し、が？」

「だつて、綺麗だつたから。」止めてあげよ!と思つて。」

可愛いもの、綺麗なもの。

生きている以上は不变ではありえない。

だつたら…死んで、変わらなくなつた方が良いだろ?う?

さつきの人の子供も、可愛かつたから僕がそこで止めてあげたんだ。

…思えばそれが、「通り魔」としての最初の行いだつたつけ。

「大丈夫、独りじやないよ。」止めてあげた、沢山の人達
がいるし、それに…」

ちらり、と僕はお地蔵様に目を向ける。
最初は普通の地蔵と同じ灰色だつた。

でも、僕の捧げた供物の…人間の血を浴びたせいで、赤茶けた「黒」
になつた。

いわば、「黒地蔵」は僕の殺人の成果。

「お地蔵様も、君を救つてくださいね。」

そう言つて僕は、彼女の体をお地蔵様の前に供える。

ちょっと悲しそうな顔でこときれてるけど、それはそれで美しい。

お地蔵様、お地蔵様。

今日の供物は美しいでしょ?う?

僕のとつておきなんです。

女の人に追いかけられた時は対処に困ったし。

彼女が警察に行くなんて言つた時はヒヤリとしたけど。
あなたがあの人をお救い下さったこと、感謝しています。

今日もちゃんと、あなたにお供えできて良かった。

うん。今日も良いことをした。

明日は誰を捧げよう。

(後書き)

お久し振りで「jazz」ます。

相も変わらず詰めの甘い秋月真氷でござります。
ホラー、といつにはかなり無理があり、かといってジャンルに物凄く迷いました。できないんなら止めとけ、自分。

少しでも、皆様の心に残れば幸いです。

無論、それが良い方向であるとなおさら嬉しいのですが…

最後になりましたが、ここまで読んで下さった皆様方に感謝を。

2008年7月某日 秋月真氷・拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6702e/>

黒地蔵

2010年10月28日02時38分発行